2019.2.2(土)　天気/曇り　参加者/ 一般７人　指導員：２人（森功一、辻愛子）
暦/大寒、末候、「鶏始乳（にわとりはじめてとやにつく）」　観察道具/ファーブル

もうすぐそこまで春が来ている、つまり寒さが底という底をつく頃。森に入ってすぐの湿地帯の水たまりでは、氷が姿をあらわしていた。水に浮かんだまま凍って、ともに時を止めていた落ち葉たちは、溶け出す森に止まった時計の針がまた動き出していくようだ。空を見上げると、澄んだ空気の中、強く明るくなった光に照らされ、青の空をバックにくっきりしたシルエット。凛とした佇まい。この季節の冬木立が好きだ。

地面をよく見ると、ぺったりとへばりつきつややかに葉を広げるロゼットたち。健気な姿だ。日に日に確実に温められている地面の熱を湯たんぽに寒さを乗り切っているのだろうか。ユキヤナギも春に備えてちっちゃなつぼみをたくさんつけている。名前のとおりセイタカアワダチソウの穂がこまかい泡を立てている。

今日は森さんが秘密兵器を持ってきてくれた。通常では見ることができないミクロの未知の世界へと、持ってきてくれた木の皮のようなものをのぞき込む。するとそこには、四方八方に細い針のような毛が現れた。よくよく見ているとその中で一粒の輝くものが。フユシャクの卵という。なんという小ささだ。毛のようなものと一緒に産み付けたそうで、確かにそれがないと今にもこぼれて失ってしまいそうだ。次にカゲロウの羽をのぞき込む。透き通った羽の模様はまるで葉っぱの葉脈とそっくりだ。初めて見る世界が広がる。

ベニカミキリを見つけに行こうという森さんの声掛けで、竹やぶに。切り出して積んである竹の中から、若すぎず、枯れすぎず、ちょうどよい塩梅だという竹を一本取り出し、一節切り出す。そして、ナタを入れ、半分に割る。すると、中にはおがくずのようなものがたくさん。ベニカミキリの幼虫のフンと知る。フンと言っても触ってみるとふかふかふわふわで気持ちいい。中には蟻がでてきた。肝心のベニカミキリを探し、狙いをつけて更に竹を割っていく。が、なかなか見つからない。もう皆、あきらめかけていたその時、努くんが発見！きれいな紅色をした主役が登場した。皆でまじまじと観る。

今回はそのまま竹やぶの中でスケッチタイムをすることにした。すると、てるくんが奥の広場にある遊具で遊んでくると、ゆうかちゃんを連れて行ってしまった。スケッチよりも遊具かぁ、と少しさみしい気持ちでいると、しばらくして「見つけたよ～！」とぽってりとしたアベマキとツクツクしたそのぼうしを小さな手の中にたくさん詰めて帰ってきた。てるくんの中に、センスオブワンダーが息づいているのだと、うれしい瞬間だった。

それにしても、ベニカミキリに出逢う為に張りきって、のこぎりやナタで大活躍した服部くんだが、「ベニカミキリとそっくりだね！」という好美ちゃんのツッコミで、その日の服部くんの服のコーディネイトからベニカミキリにしか見えなくていつまでもおかしかった。